慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評リプライ : 非線型思考のただなかで : 近森高明氏の拙著書評論文に寄せて
Sub Title	
Author	吉原, 直樹(Yoshihara, Naoki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2012
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.17 (2012. 7) ,p.138- 142
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次タイトル : 「著者リプライ : 非線型思考のただなかで」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20120700-0138

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評リプライ：非線型思考のただなかで

―近森高明氏の拙著書評論文に寄せて―

吉原　直樹

拙著『モビリティと場所』にたいする書評は、近森氏があげている以外にもいくつかあるが、それらを含めて非常に表層的な、手を抜いているなと思わせるようなものが多い。それについては不快感というよりは、たぶん「読みづらかったのだなあ」と自戒することしきりである。ただ、齋藤純一氏の書評論文だけは自己の立ち位置を明瞭にした、きわめて読みごたえのあるものであった。さて今回の近森氏の書評論文は、それに勝るとも劣らない、立ち位置と方位のはっきりした力のこもった作品である。さいわい、拙著は英語版（*Fluidity of Place*,Trans Pacific Press,2010）および韓国語訳（모빌리티와 장소, 2010）で刊行され、また *Journal of Regional Science*, vol.51,no.4.においても書評され、海外にもそれなりにインパクトをおよぼしている、と想到される。とはいえ、それがどの程度のものであるかは皆目見当がつかない。しかし、近森氏の力感がみなぎる書評論文を読んで、拙著の作品としての位置価をある程度客観的に見定めることができたように思う。

近森氏は拙著の基底に「流動する現実にせまるための知の流動化」へのまなざしを観て取り、グローバル化にともなうさまざまなイッシューを「マクロな社会理論とミクロなフィールドの記述を往還しながら」（傍点、筆者）読み解く筆者のスタンスを浮き彫りにしている。拙著に向けられた批判の最たるものが、理論としての展開が「中範囲理論」としての実証分析につながっていないという類のものであることを想起すれば、この近森氏の指摘は、社会理論の深いところからなされた、まさに拙著の核心部分を射抜くものであるといえる。拙著でめざしたものは、まぎれもなく「知の流動化」をとらえる視座の設定である。とはいうものの、近森氏が暗に指摘しているように、この課題につながる展開が十分になされていないという憾みが残ることは否定できない。とりわけ、拙著を貫く「非線型の思想」は基調音となっているにもかかわらず、きわめて部分的で断片的な叙述に終わっている。そこで、ここではこの「非線型の思想」について拙著の補足をかねて少し述べることにする。

拙著が時間と空間を論じることから始まっているのは、けっして偶然のことではない。時間と空間は社会の現象にとって単なる容器（コンテナー）ではないこと、むしろどのような物理的存在、社会的存在も時間と空間を通して構成されるということをまず指摘したかったのである。このことによって外部のものとは無関係に均等に流れるニュートン的時間、不変の測定可能な長さでできているデカルト的空間が相対化され、時間も空間も流れている、つまり動的（ダイナミック）なものである

吉原直樹「書評リプライ：非線型思考のただなかで―近森高明氏の拙著書評論文に寄せて―」
『三田社会学』第 17 号（2012 年 7 月）138-142 頁

という認識がきりひらかれる。そしてこうした認識とともに、「決定論的世界と偶然性だけからなる恣意的世界」という二分法の下にあった確実性の物語に終止符が打たれる（Prigogine 1997=1984）。このようにして非線型思考の原認識が構成され、カプラになぞらえていうと、ものごとが機械論的な枠組みから解放され、関係のネットワークのなかに組み込まれることになるのである（Capra 1996）。

拙著では、グローバル化の分析を通して、そしてそこに鍵（キー）概念として埋め込まれることになるモビリティと場所の意味をさぐることによって、非線型思考の端緒（可能性）と関係のネットワークの存在形態を浮き彫りにしようとしたのである。ちなみに、そこでいうグローバル化とは、ごく簡約化していうと、「個別のアクターや領土的な単位の特性ではなく、資本主義経済全体の創発的な特徴からなり、それはさまざまなエージェント間の相互作用、特に地球全体に及ぶ時間-空間の『距離化（ディスタンシエーション）／差別化』および時間-空間関係の新たな形態の『圧縮』を通して生じている相互連関から発現している」（Urry 2003：4）のである。この場合鍵となるのは、やはり時間-空間の流動性である。というのも、相互作用効果を時間-空間の流動性という「カオス的秩序」にかかわらせて論じることによって、グローバル化を内的な変数間のつながりによって説明する「線形思考の罠」から逃れることができるからだ。

こうしてみると、非線型思考は「流動体のメタファー」と一体であることがわかる。他方、線型思考は常に「領域性のメタファー」とともにあった。それは、構造とエージェントがいわゆる一対一の関係にあり、しかもそれが社会組成的（ソサイエタル）あるいは国民国家的な「領域（リージョン）」に回収されることを与件としてきた。しかしグローバル化は、「ひとつにまとめられている領域」に代わって「個々別々の領域へと伸びていくネットワーク」を拡げていくことによって、事実上、「領域性のメタファー」を存続不可能なものにした。そして「ある場所と別の場所との違いを示す境界も関係もない。その代わりに、ときとして境界を揺れ動き、何かを漏らしたりまったく消えてしまったりして、諸々の関係は切れることなく自らの形を変えている。そしてときとして、社会的空間は流動体のようにふるまう」（Mol and Low 1994:643）という言説、すなわち流動体のメタファーを押し上げることになった。ちなみに、ギデンズは次のように言っている（Giddens 1990=1993:85）。

> 「ある場所で生じる事象が、はるか離れたところで生じた事件に方向づけられたり、逆に、ある場所で生じた事件がはるか遠く離れたところで生ずる事象を方向づけていくというかたちで、遠く隔たった地域を相互にむすびつけていく、そうした世界規模の社会関係が強まっている‥‥。」

ギデンズによれば、こうした「世界規模の社会関係」の特徴は、何よりも「それだけで自足したところはない」、つまり「領域」には還っていかない点にある。

ところで「流動性のメタファー」をより強く押し上げ、非線型思考の中心に据えているのが

モビリティであり、場所である。グローバル化の進展とともにあるモビリティは、これまで「領域性のメタファー」の下で定住との対比で論じられてきた移動の概念に根本的な変改をせまっている。かつては、移動は国民国家を境にして「内」と「外」を行き来する一方向的なフローとみなされた。しかしヒト、モノ、カネのボーダレスなフローに視軸を据えるモビリティは、非線型的な文脈で流動性とか複雑性の含意をになって論じられるようになっている。実際、モビリティ・スタディーズのフロンティアでは、モビリティを複層的な混成作用をともなったフローととらえる傾向が強まっている。

そうした複層的な混成作用の一つがモビリティをめぐって生じている障壁（かべ）である。これについては、筆者自身、別のところで次のように述べた（吉原 2012:250）。

「移動は常に障壁とともにあった。近代以降に限定しても、移動は国境を越え、体制の設けた壁を打ち破ってなされてきた。グローバル化はこうした流れを加速させながら、そのさきに新たな障壁を作りだしている。移動する人びとは障壁を乗り越えることによって、皮肉にも新たな障壁に晒されるのである。移動は社会のハイブリッド化をおしすすめると同時に、単一の文化とか伝統にこだわる側からの新たな障壁の形成を招いている。しかもその障壁は容易に突き破ることはできない。」

実は、こうした「障壁を回避して小さな世界に閉じこもるのか、それとも困難でも乗り越える努力を続けるのか」をめぐって場所が一大争点になっているのである。場所は果たして、人びとに「領域性／近接性への渇望」を喚び起させ、かれら／かの女らを再び「線形思考の罠」にひきいれる場となるのか、それとも「いくつもの相争いあう断片化した『他者』の言語／文化／歴史の諸要素を、自らの文化にとって‥‥価値あるものとして評価する意欲／能力」と「さまざまな『他者』と出会いたいがためにリスクを引き受けようとする意志」（Urry 2003:133-4）をもつコスモポリタンをはぐくみ、かれら／かの女らが跳梁する場となるのであろうか。筆者は拙著において、「創発性」と「節合（アーティキュレーション）」によって導かれた関係のネットワークが何らかの形で作動する場として場所を措定したが、そこにひそむ両義性のメカニズム／機制については指摘するにとどめた。このリプライ論文でもその点は展開しないままであるが、場所がモビリティとのかかわりで最重要の問題構制（プロブレマティック）としてあることについては何とか確認することができた、と思う。

なおこのことに関連して一言付け加えておくなら、ポスト３・11 のこんにち、被災地の人びとと共有する基盤を失った、コミュニタリアン主導のコミュニティ論が吹き荒れている。その一方で、ナオミ・クラインが「惨事便乗型資本主義」というようなものが被災民をくいつぶしている（Klein 2007=2011）。まさに人びとの共同性にかかわるやばい事態が進行しているのである。考えてみれば、こうしたコミュニティ・インフレーションの状況は筆者が昨年上梓した『コミュニティ・スタディーズ』の視圏内にあるが、より直接的には、上述の場所の問題構制と接

続可能である、と思われる。

結局、拙著の眼目は、非線型思考によって貫かれるとともに、近森氏が達意に指摘しているように「流動する現実にせまるための知の流動化」に照準することにある。拙著は圧倒的なグローバル化を前にして制御不能な巨大な「ジャガーノート」がよろめきながら進んでいるとするギデンズ、種々のテクノロジーにより生み出されたとする「距離の消滅」について詳述しているケアンクロス、「液状化する近代（リキッド・モダニティ）」の加速化について論じているバウマン、「インターネット・ギャラクシー」によって導かれた情報構造に言及しているカステル、はたまた国民国家主権という観念が単一の権力システム、すなわち「帝国」に置き換えられてしまったとするネグリ＝ハート等に大きな刺戟を受けている。いちいちあげればきりがないが、これらの人びとは意識するしないにかかわらず、立論に際して非線型思考に大きくシフトしていた。

いまさら指摘するまでもないが、グローバル化は線型思考の下にあった既存の社会科学の力量を上回って進展した／しつつある。このようにグローバル化が社会科学を容易に越えてしまうということは、まぎれもなく「知」の危機を招来するものであるが、同時に「知の流動化」を大きくうながす可能性をはらんでいる。筆者はかつて若き社会学徒とともにアーリの『社会を越える社会学』の訳業にたずさわり、近々、同じアーリの *Global Complexity* を訳出刊行することになっている。これらは「知の流動化」の真ただなかで、それらの息吹を感じながらおこなわれた、そして現におこなわれているものであるが、「知の流動化」はさらに進み、グローバル化研究はさまざまな分枝を生みだすとともに、モビリティ・スタディーズを一本の木へと成長させることによって自らの変改をとげている。拙著はこうした動きに触発されて４年前に刊行したものであるが、その後、事態は著しく進展し、ポスト・グローバル化の理論地平が取り沙汰されるまでになっている。そしてそうした状況のなかで、東日本大震災がわれわれに何を伝え、またそこから何を学ばなければならないかという問いに向きあわざるを得なくなっている。

［文献］

Capra,F., 1996, *The Web of Life*,HarperCollins.

Giddens,A., 1990, *The Consequences of Modernity*,Stanford University Press.（＝1993，松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か？：モダニティの帰結』而立書房）

Klein,N.,2007, *The Shock Doctrine: the rise of disaster capiatalism*,Metropolitan. Books.（＝2011，幾島幸子・村上由見子訳『ショック・ドクトリン』（上），岩波書店）

Mol,A. and Low,J.,1994,‘Regions,network and fluids: Anaemia and social topology,’ *Social Studies of Science*,24:641-71

Prigogine,I., 1997,*The End of Certainty*,Free Press.（＝1984，安孫子誠也・谷口佳津宏訳『確実性の終焉―時間と量子論、二つのパラドクスの解決』みすず書房）

Urry,J.,2003,*Global Complexity*, Polity.
吉原直樹, 2012,「あとがき」（大西仁・吉原直樹監修，菱山宏輔ほか編『移動の時代を生きる：人・権力・コミュニティ』東信堂）

（よしはら　なおき・大妻女子大学）